

同窓会便り

発行
 東北大学 電気・通信・電子・情報同窓会
 仙台市青葉区荒港字青葉
 東北大学工学部電気系学科内
 TEL 022-222-1800
 発行責任者
 緒方研二
 (題字 緒方研二会長)

通信工学科創設 50周年を迎えて思うこと

会長 緒方研二
 (昭和十六・十二電卒)

本年を以て通信工学科が創設五十周年を迎えることになりました。昭和十九年に第一回の卒業生を送り出してから、戦争直後の苦難の時代を乗り越えて今日まで、社会の第一線で活躍する多数の通信技術者を輩出しました。これらの方々をお育ていただいた先生方から敬意を表しますと共に、卒業生の益々のご発展を祈ってやみません。電気系同窓会としても有為な人材を多数会員にいただくことが出来て誠に心強い限りであります。



私が在学した頃は電気工学科だけしかありませんでしたが、三年の時に通信工学科の創設がまりました。その背景はご寄稿をいただいた福島先生のお話からうかがえるものと期待しております。

何れにしても、当時の時代の要請の中には電気技術者の増強があり、これに必える施策の一つが通信工学科の創設であったのかと思われまます。

通信工学科が出来たからといって電気通信の新しい講座が増えるという事はなかったように、元元弱電を標榜してスタートした東北大学の電気工学科では従前から通信の講義が行われていました。電気系同窓会の名簿を見ても、通信工学科が出来た後の電気工学科からも多数の卒業生が電々公社を志願し、あるいは電気通信産業界に就職して活躍されております。

通信工学科が生れた頃は全国的に工学部の羽振りがよく、他の学部からは一種の僻みを以て見られたこともあったと言われておりま

す。その反動として戦後工学部就職論が起り、これからの日本は経済学部と農学部があれば十分であるという暴論まであって、折角誕生した東大の第二工学部はこのような批判の中で消滅することになりました。しかし、東北大学の通信工学科は生き残り、発展を続けて今回五十周年を迎えることになりました。誠に同慶にたえません。

それにはそれなりの存在理由が認められたからに外なりません。「学は先覚を尊ぶ」と申しますが、思い出されるのは電気系同窓会の偉大な会員であられた松前重義先生のことです。この八月に八九歳で惜しくも逝去されましたが、日本の電気通信事業はこの方を中心にして発展して来たと言っても過言ではありません。通信工学科五十周年を松前先生とご一緒に迎えることが出来ないのは誠に残念であります。また、大泉、松尾の両先生も幾多の電気系の学生を育て、電気系同窓会を支えて下さった大事な先生方です。これらの方々を相次いで失い、痛恨の極みであります。

しかし、明るい話もあります。通信工学科第一期生であった虫明先生が今春勲二等瑞宝章をいただきましたことあります。八木、宇田両先生の業績を引き継がれた虫明先生は、無線工学の発展に多大の貢献をなさいました。二年程前電子情報通信学会誌にお書きになった回想を読ませていただき、広島から笈を負って仙台に学び、宇田先生のご指導の下で研究業績を次々と重ねてゆかれたお話に深い感銘をうけました。今後もお元気で研究に教育にご活躍下さることを祈念しております。

最後になりましたが、今年の電気系同窓会の総会で、佐藤利三郎先生には同窓会の副会長になっていただきました。佐藤先生も通信工学科第一期生で、これからの同窓会は先生を中心として発展することが期待されます。

通信工学科創設五十周年を迎えていろいろなことが思い出されます。この機会に更めて先輩の方々のご苦勞を偲び、同窓会会員の益々のご発展を祈念してお祝いのご挨拶と致します。

副会長に就任するにあたって

佐藤利三郎
 (昭和十九・九通卒)



東北大学電気・通信・電子・情報同窓会総会が、平成三年九月五日夕方学士会館で開催されました。議題の一つとして会則の改正が行われ、平成四年度から新しく副会長を置くことが承認されました。札幌での用事を果たし、午後の便で上京し、直接総会の会場に顔を出した途端突然副会長に指名されびっくり、ついで総会後の懇親会で一言といわれ、先日御逝去なされた松前先生のお言葉を紹介しながら、同窓会の発展のために頑張りましょうと副会長就任の挨拶を致しました。

電気同窓会は電気工学科の第一回生が卒業された大正十一年頃になんとなく設立されたようで、ガリ版刷の会報(名簿と住所、それに結婚などのお知らせ)が発行され、結婚したとき、これを御縁にと挨拶がわりに五円を寄付することが会則でした。幹事が会計簿を保管し、次期幹事を勝手に指名して、会計簿にサインして交替する仕組みでした。昭和二十五年頃角川正先生から幹事をおしつけられた記憶があります。

鳥山四男先生を同窓会長として会則も完備したのは昭和四十四年頃です。それから先輩各位の御努力によって今日の立派な同窓会となり、毎年の集いも大盛況で、誠に喜ばしい次第です。

同窓会の仕事は互いの親睦をはかることですが、百周年を迎えんとする母校東北大学、又その工学部、通研、学科等は伝統を受けついで更なる飛躍をしなければならぬ時でもあります。同窓会の果たすべき課題も大きいと思えます。会員の方々に益々の御努力をお願いし、御挨拶と致します。

創設当初の 通信工学科

福島 弘毅



東北大学は創設の当初から独自の研究の推進をその使命としてきた。大正八年電気工学科の開設以来、研究の重点を弱電

に指向したのは八木秀次先生の卓見である。八木・抜山・千葉三教授を中心とする「電気を利用する通信法の研究」に対して、斎藤報恩会から巨額の研究費の補助を受けることが出来たので、昭和の初期には通信工学のメッカとして、応世間に認められるようになった。昭和十年、あの緊縮財政のさなかに電気通信研究所の設立が認可されたのも、抜山平一教授の行政手腕というよりも、東北大の研究実績が物を言ったものであろう。

半世紀前の電気工学は強電工学の全盛時代であった。大学の電気工学科を卒業すると、電気事業主任技術者第一種の資格が無試験で貰えたものである。たしか昭和十三年頃と記憶するが、当時通信省工務局長であった松前重義氏等は弱電技術者の人材不足を憂慮するあまり、無線技術者検定制度を制定し、大学の通信工学科卒業には無条件で一級無線技術士の資格を与えることとした。そのねらいは大学に通信工学科を作らせようという魂胆であったろう。ところが、東大をはじめとする大学側は、電気工学という学問は一つであって強電・弱電というように細分化すべきでない。技術者が不足ならば講座を増設して、学

生定員を増加すればよいという申し合わせをやっていた。たしかに正論で、必ずしも部外の通信省の横車に反発した訳ではあるまい。結局、抜け駆けをやって昭和十六年度から通信工学科を開設したのは、一番新しい大阪大学だけであった。松前氏の母校東北大は同氏を裏切る破目となってしまった。

国際電気通信株式会社はこのピンチを打開するため、通信工学科設立費用の足しにと二十万円の寄付を申し出た。当時上野仙台間は急行で約六時間かかったが、この大金を現ナマで仙台まで運んだ渡辺教授の苦勞談を後で聞かされた。実はこの寄付金が現在の通研財団の基礎となったものである。

種々な迂余曲折があつて、ようやく昭和十七年四月に通信工学科に新入生を迎える運びになった。議会で予算手続きの関係から、学生募集の段階では電気工学科の名前で定員の二倍を募集し、入学後希望に応じて通信工学科への転科を認めることとなった。さて、新入生を迎えて、転科願を受け付けた処、殆ど全員が通信希望と相成った。両学科の学生数が一応配分できたのは渡辺先生の卓抜なお説教の賜であった。

このような次第で、両学科の教課内容は双子の兄弟のようによく似ていた。例えば、電気科の時間割に宇田教授担当の高周波工学があると、通信科の時間割では、同じ曜日の同じ時間に同じ教室で同じく宇田教授の無線工学の授業が行われた訳である。両学科のカリキュラムが次第に独自の体裁を整えはじめたのは、戦後新制大学に移行して後の話である。

通研分館の南側のグラウンドを潰して、極めて粗末な木造二階建てのバラックを建てることができたが、戦時中の資材難でドアまで付ける余力がなかった。窮余の一策で、夜陰に乗じて工学部本館の地下室に潜入、電動発電機室のドアを盗み出し、わが研究室の入り口に取り付けた。

私の担当は一年生の学生実験であった。学生数は一挙に二倍になったにもかかわらず、実験器具機材は発注しても全く入手不能で、僅かに入手できたのは、粗末な実験机と椅子ばかりであった。旧電気科時代の遺産をやりくりして、曲がりなりにも学生実験をこなすのに苦勞した。

創設当時の学生諸君は、戦局が日に日に不利となる中で、食糧難や勤勞動員で満足な授業も受けられず、学年短縮で二年半で卒業させられた。このいわば月足らずの諸君が、あの戦後の荒廃の中でエレクトロニクスの第一線で活動し、わが国の驚異の経済発展の原動力となったことを思うと、なんとも不可思議としかいようがない。

通信工学科創設五十周年 記念行事御案内

本年度は通信工学科が創設されてからちょうど五十周年にあたります。これを記念して、東北大学電気系同窓会では、母校の東北大学電気・情報系と共催で左記のような諸行事を行うことを計画しております。同窓生の多数の皆様のお参加をお願い申し上げます。

東北大学工学部通信工学科 創設五十周年記念行事

一、記念祝賀会

日時 平成四年一月三十一日(金)

午後三時～七時四十分

場所 ホテル仙台プラザ

産官学特別フォーラム

午後三時～四時十五分

記念会

午後四時三十分～五時三十分

「エレクトロニクス発展の あゆみ調査会」報告V

佐藤 利三郎

昭和六十二年一月二十日松前重義先生を会長として、理事、幹事二十名によって発足した(略称)あゆみ調査会も平成三年で六年を経過しました。同窓会便りには昭和六十二年から毎回報告しています。この会は、今日のエレクトロニクスの発展をもたらした先人のあゆみを調査し、その偉業を後世に伝える事業を行っています。平成三年度は理事大会2回、分科会、顧問会、実行委員会を東京と仙台で約10回開催し事業を進行しています。前回報告の三つの事業 一、先輩との対談を文章化しまとめること 二、文献整理と重要文献の複写と概要のまとめ 三、後世に伝える出版計画などを進めています。

会長松前先生には平成三年八月二十五日御逝去なさいました。先生の御遺志を帯して一日も早く達成すべく努力します。同窓会の皆様の御協力を切に御願ひ致します。事務局は ☎一〇〇 千代田区丸の内二一四一丸の内ビル六・五区 エレクトロニクス発展のあゆみ調査会事務局 事務局長 斎藤雄一宛 電話〇三三三二〇一一二三八五です。

二、研究室公開

日時 平成四年一月三十一日(金)

午前十時～午後四時

二月一日(土)

午前十時～午後四時

場所 電気工学科

通信工学科

電子工学科

情報工学科

電気通信研究所

創設当時の学生として

虫明 康人
(昭和十九・九通卒)

私達は通信工学科の第一回卒業生であるが、入学したのは実は電気工学科で、昭和十七年四月であった。その際、通信工学科が創設される予定になっていたため、電気工学科に新学科分を含めて計四十名が入学した。それは、我が国が太平洋戦争に突入して間もない頃であった。そして同年十月、希望者に通信工学科への転科が認められることになったが、希望者が多く、結局約三分の二の学生が転科手続きをとって通信工学科初年度の学生となった。

しかし乍ら実際の講義は、元来弱電寄りであった電気工学科の講義そのもので、転科をしなかつた者と同じ教育を受けた。そのため、誰がどちらの学科に属しているのかは名簿を調べて見なければはつきりしないというのが実状であった。

当時の電気工学科は櫻小路(現片平)の工学部本館(現選製錬研究所)にあり、その西半分が電気工学科であった。講義室と製図室は三階にあり学生実験室は一階にあった。製図機は各自に割当てられていたので、その引出しは大変有効にロッカー代りに使うことができた。通信工学科の木造の建物は後に建



てられたが、私達は大学での時間の大部分を工学部本館で過ごした。

その頃の大学では軍事教練が授業時間割に組み込まれていた。ゲートルを巻き銃を持つて運動場に整列し、配属将校から気合を入れられたこと、軍事演習で仙台南部の中田辺りまで行軍をした後、突撃訓練で稲刈り後の田んぼの中を走ったことなどが思い出される。

このような大学教育であったが、昭和十八年十月からは卒業研究が始まり、私達は各研究室に配属されてそれぞれ異なった大学生活を送ることになった。そして翌年九月、戦時下の人的資源不足を補うための修業年限臨時短縮により半年早く本学を卒業した。しかし実際には、卒業前に陸軍あるいは海軍の技術士官候補生として採用された者が多く、卒業の日まで本学に残っていた者は極く少数であったと記憶している。

在学中の思い出としては、工明会運動会とその晩のコンパ、工明会遠足、工場見学、学外実習などがあるが、戦時下の特殊なものとして松島飛行場建設の勤労奉仕もあった。その作業は炎天下での土掘りで、大変きつい重労働であったこと、福島先生が隊長を務められたことなどを覚えている。また、電波報国隊としてクラスの大半が東芝富士工場に動員され、軍用電波探定機の調整に約二ヶ月間従事したことも思い出される。その他思い出は尽きないが、特に忘れることができないのは、食糧不足に基づく慢性的な空腹などの苦難である。

以上、いずれも私の頭の隅から消えかかっているかすかな記憶を頼りに述べたが、当時の大体の様子を推察する際、多少でも参考になれば幸いである。

通信工学科の沿革

工学部通信工学科は昭和十六年四月に勅令四七六号をもって設置され、本年(平成三年)創設五十周年を迎えた。創設当初は電気工学教室から移った実吉、宇田(兼担)の二教授と福島助教が三講座を担当して学生の教育が開始され、昭和十九年九月に第一回の卒業生を送り出した。昭和十八年に一講座が増設され、戦後新制東北大学となって以降の昭和二十九年省令により五講座が制定された。その後、昭和三十三年にはこの五講座の名称が変更されている。青葉山移転後の昭和四十三年および四十四年にそれぞれ三講座および一講座が増設され、九講座に拡充された。昭和五十九年には新設の情報工学科に通信工学科の三講座が振り替えられ、現在の六講座体制が確立されて現在に至っている。

- 昭和十六年 通信工学科創設(通信工学一講座)。
- 太平洋戦争勃発。
- 昭和十七年 通信工学二講座増設。実吉純一、宇田新太郎両教授および福島弘毅助教が担任する三講座により学生の教育開始。
- 通信工学一講座増設。
- 昭和十八年 第一回生二十三名卒業。
- 昭和十九年 岡部金治郎先生文化勲章受章
- 仙台大空襲。終戦。
- 昭和二十年 日本国憲法施行。教育基本法、学校教育法公布。
- 東北帝国大学を東北大学に改称。
- 昭和二十四年 学制改革にともない新制東北大学発足。
- 昭和二十八年 新制大学院発足(工学研究科電気及通信工学専攻)。
- 昭和二十九年 国立大学に関する省令の公布により通信工学科五講座制定

昭和三十年

(無線通信工学、電子現象論、有線通信工学、電気音響学、電気応用計測)。

昭和三十一年

八木秀次先生文化勲章受章。

昭和三十三年

電子工学科創設。

昭和三十九年

旧省令を廃止し、新たな省令により通信工学科五講座制定(回路網学、通信方式学、高周波工学、電気音響学、電気応用計測工学)。

昭和四十二年

青葉山新キャンパスに移転。

昭和四十三年

三講座増設(能動回路工学、情報機器工学、情報処理工学)。

昭和四十四年

一講座増設(電波物理工学)により九講座に拡充。

昭和五十九年

情報工学科創設。これにともない、能動回路工学講座、情報処理工学講座、情報機器工学講座を、それぞれ基礎情報学講座、知識工学講座、言語情報工学講座に改め、情報工学科に振替。現在の六講座体制確立。

平成元年

西澤潤一先生文化勲章受章。

平成三年

学科創設五十周年。





平成三年八月二十五日。私達の敬愛してやまなかつた松前重義先生の訃報に接し、断腸の思いであります。心から先生の御冥福をお祈りいたします。

先生は、大正十四年東北帝国大学工学部電気工学科を御卒業の後通信省に入省され、電話の遠距離通信を可能にした世界的発明の「無装荷ケーブル」を完成、昭和十六年工務局長となり、昭和十九年召集を受け陸軍二等兵として戦地に送られ、フィリピン戦線から奇跡の生還をし通信院総裁となり、昭和二十年広島原爆調査団長として爆心地を視察し、終戦に尽力されました。戦後は昭和二十

大泉充郎先生を偲んで

野口 正一 (昭和二十九電卒)



本学名誉教授大泉充郎先生には、平成三年二月二十二日にお亡くなりになりました。享年七十七歳、問もなく七十八歳の

お誕生日をお迎えになるときでありました。慎んで心から哀悼の意をささげます。大泉先生は東北帝国大学を昭和十年に御卒業後、安立電気に入社され、昭和二十六年より東北大学にお移りになられ、昭和二十八年一月に東北大学電気通信研究所の教授となられました。先生には当初、音声工学・通信工学及び情報工学の研究に従事され、情報工学の研究では、その評価が我が国で未だ定まらぬ時からいち早く開始され、先生の当時の研

佐藤 利三郎 (昭和十九・九通卒)

七年東海大学理事長、学長として活躍され、学生数六万人の最大規模の私学に育てあげられました。

松前先生は徹底した平和(反戦)主義者であり、内村鑑三に師事してクリスチャンの信仰をもち、独創技術、技術立国もすべて世界平和への道として、先頭に立って行動されました。松前先生の卒業論文は「三種真空管の入力インピーダンス」で披山先生のもとで実験研究され、すばらしい論文にまとめられました。この研究は渡辺肇先生が受け継がれて学位論文となった話も有名です。無装荷ケーブルの実現には八木先生、披山先生は勿論多くの人達の独創技術が貢献しています。これらの研究成果は有線工学通信工学大系として出版されました(永井健三「伝送回路網学」、浜田成徳「真空管工学」、松前重義「電気通信

究の構想は、今日に至るも目を見張る先見性に満ちたものであります。特に昭和三十年初期に推進されたコンピュータプロジェクト SENAC-1 の建設は、その後の我が国のコンピュータの発展に、多くのインパクトを与えました。また先生は、日本における学術のより一層の発展を目的として、大学に大型計算機を設置するプロジェクトを、日本学術会議会員の最も重要なメンバーとして推進されました。先生の努力によって、我が国の七つの大学に大型計算機センターが設置されたといっても過言ではありません。大型計算機センターがその後、我が国の学術の発展に与えた寄与の大きさを思うとき、改めて先生の洞察力と卓見の深さに、ただただ頭が下がるばかりであります。この間、先生には昭和四十四年に東北大学

松尾正之先生を偲んで

星 宮 望 (昭和三十九子卒)



東北大学名誉教授、松尾正之先生は、平成三年七月二十八日午後七時三分、埼玉県本庄市で逝去されました。

先生は、大正十三年に新潟県五泉市でお生まれになり、昭和二十一年東北帝国大学工学部通信工学科を御卒業後、東北大学工学部助手、電気通信研究所助教授を経て、昭和三十七年東北大学工学部教授(電子工学科、電子回路工学講座)に昇任されました。その後、昭和六十二年のご定年まで、二十五年の長きにわたり、深い学識と温厚なお人柄で広く人々に慕われつつ、東北大学工学部における教育と研究、および学部と学科の運営に全力を傾注されました。また東北大学を定年退職された後も、東京電機大学工学部教授(応用電子工学科)として後進の指導に情熱を燃やし続けてこられました。

て、驚かされたのも松前先生です。先生はこまなく東北大学を愛し、いろいろな東北大学に御力を賜りました。東北大学電気系の先祖は八木、披山両先生であります。八木秀次先生御生誕百年祭(昭和六十一年)、披山平一先生御生誕百年祭(平成元年)が行われましたが、その都度来仙されて私達に先生の理想の道を示されました。先生の思い出しは止まるどころがありませんが、先生の学生に語り続けておられた言葉を記し、心から先生の御霊の安らかならんことをお祈り申し上げます。

若き日に汝の思想を培え
若き日に汝の体軀を養え
若き日に汝の智能を磨け
若き日に汝の希望を星につなげ
松前 重義

先生のご業績は、電子工学に関する基礎から応用に至るまで広範囲に及ぶ輝かしいものであります。全体を貫くものは、医用電子工学という新しい学問分野の確立に向けられた先駆的な研究であります。なかでも、計測用直流増幅器とその医用計測への応用、生体用電極の諸特性の解析、半導体の電界効果を用いたイオンセンサに関する研究などは特筆すべきものであります。このような先見性のある独創的な研究とご功績により、先生は昭和六十三年に紫綬褒章をお受けになっておられます。

学会活動におきましては、先生は、電子通信学会、計測自動制御学会、電気学会などで活躍されましたが、特に、日本MEE学会では永年の間、理事をつとめられ、昭和五十七年には年次大会長をつとめられました。国際的にも、米国電気電子学会(IEEE)東京支部医用電子工学分科会の議長として活躍され、また、昭和五十九年より同学会のフェローの地位に推挙されました。先生からのご薫陶を受けた松尾研究室出身

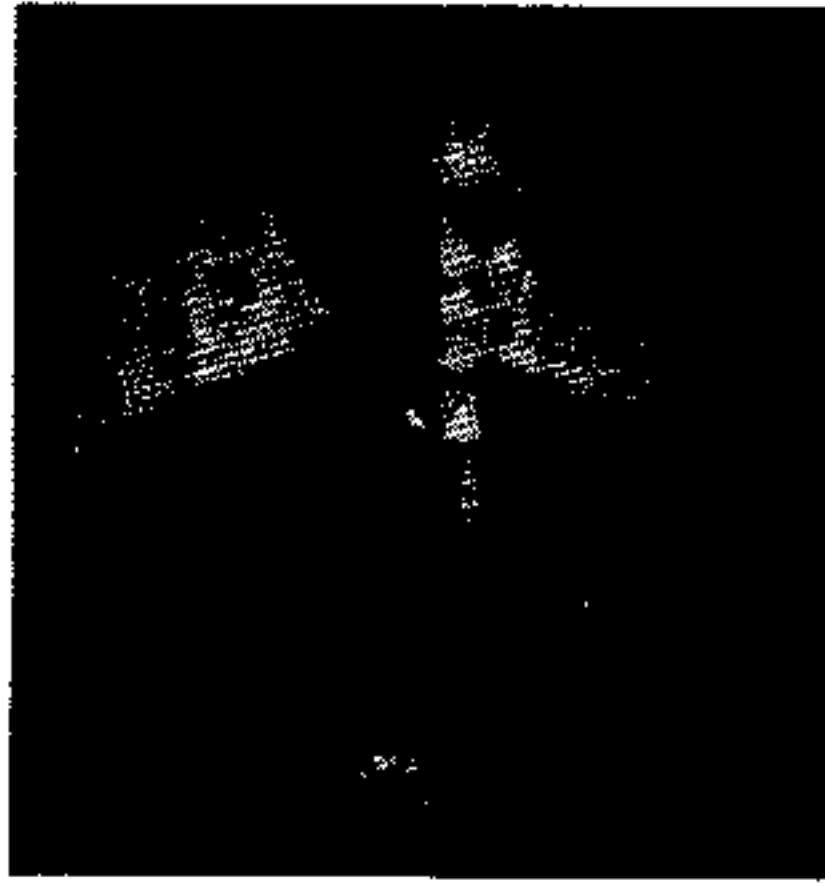
に設置された大型計算機センターの初代センター長に就任され、東北大学大型計算機センターの基礎を築かれました。先生にはその後、東北大学に新たに設置された応用情報学研究所センターに移られ、昭和四十七年十月より初代センター長として同センター発展のために努力されました。同センターに移られてから、先生にはコンピュータネットワークの先駆的な研究を推進され、我が国のこの分野の研究の基礎を築かれました。先生にはこのように

情報科学・工学の分野で華々しい活躍をされたわけであり、他の分野、例えば音声工学の分野で、音声の分析、合成を始めとする日本のパイオニアとしての数多くの業績がございます。七十七歳になられた先生には、今後まだまだやる事が沢山あったことと思いますが誠に残念です。先生のご冥福をお祈りいたします。

虫明康人名誉教授の

叙勲をお祝いして

安達 三郎
(昭和二十八通卒)



虫明康人名誉教授が七十才の誕生日を迎えられたばかりの平成三年春、めでたくも勲二等瑞宝章の叙勲を受けられました。同窓会員として、また、先生に教えを受けた門下生として大きな喜びであり心からお祝いを申し上げます。先生がこれまで長い間、大学における研究と教育を通して学術の発展に尽された貢献の偉大さを考えるとき今回の受章は当然と考える次第であります。先生は昭和十九年九月東北帝国大学工学部通信工学科を卒業、大学院特別研究生を経て

昭和二十四年に助教、昭和三十五年には教授に任ぜられ、昭和五十九年三月に東北大学を停年退官なさいました。引続いて東北工業大学の学長に就任、平成元年三月まで私学における教育と管理運営に尽力されました。この間、先生は一貫して電子通信工学の分野で研究と教育に力を注がれるかたわら、大学外においても広い識見と優れた指導力を発揮され、電子通信技術とその関連分野において多大の貢献をなすとげられたことは万人の等しく認めるところであります。先生の学問的業績については、ここにいちいち申し述べる紙面もありませんが、ただ一つ、先生が大学院生時代に提唱した「自己補対アンテナの原理」はこのアンテナのインピーダンスが周波数に関係なく一定になるといふもので、これが米国で虫明の関係式としていち早く評価され、これがもとになって超広帯域アンテナが開発され広く実用されたことは有名であります。先生は現在これまでの研究成果を集大成する著書を執筆中と聞いております。先生が今後益々御健康で過されますように、また著書の完成が一日も早いことをお祈りしてこの度の叙勲をお祝いする言葉といたします。

の同窓会員は約二〇〇人になり、医用電子・生体工学の分野に限らず広い分野で活躍しております。この秋には先生と奥様を囲む会を予定しており、先生もそれを楽しみにしておられたと伺っております。それなのに、あまりにも突然に、そしてあまりにも早く逝かれてしまいました。残念でなりません。

木村正行先生御退官



永年東北大学工学部及び電気通信研究所にあって、研究と教育に力を尽くしてこられた木村正行先生は、平成三年三月三十一日をもって東北大学を停年御退官になりました。木村先生は、宮城県鳴瀬町でお生まれになり、昭和二十九年三月に東北大学工学部電気工学科を御卒業後、大学院に進学され、昭和三十四年三月に工学博士(東北大学)の学位を授与されています。大学院修了後、本学電気通信研究所に奉職され、助教を経て昭和四十五年に本学工学部教授に昇任されました。この後、情報工学専攻の創設委員、昭和五十九年からは情報工学科の創設委員として御尽力されました。平成元年からは、全学部学科それぞれに固有な情報の科学的な教育の必要性を見通され、学部とは独立した情報科学研究科(仮称)の創設に向けて構想検討委員会の委員長として活躍され、平成二年には東北大学評議員として全学の運営に参加されました。この間、情報機器工学・情報システム工学・知識工学の各講座を担当され、数多くの研究者や技術者の育成に尽くされました。

なお、先生は七月二十八日付で、正四位に叙せられ勲二等瑞宝章が贈られました。長い間、温かいお心で私たちに接し、お教え下さいました松尾正之先生へ心からの感謝を申し上げ、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

先生は、当初は、条件付安定帰還系や電力系統などシステム工学の分野の研究に従事され、『東北地区水火力系統の経済負荷配分システム開発』に関して第六回石川賞を受賞されました。その後、しきい値論理や各種オートマトンに関する理論的研究及び網膜を対象とした実験的研究を遂行され、網膜のモデル化により得られた知見とセル構造オートマトンに関する知見とを統合する形で文字認識の研究に着手され、セル構造回路に基づく文字認識装置を開発されました。また、音声・画像の認識の研究も手掛けられました。特に、昭和六十三年度より三年間文部省科学研究費による特別推進研究として『イメージ型と論理型情報処理を統合した高速・高精度の知的認識システムの研究開発』を推進され、毎秒二百文字の速度で印刷文書を認識することができると知的認識システムSEIJUNの開発に成功されました。これは、世界の速さを誇っています。一方学外においては、日本オペレーションズリサーチ、計測自動制御、人工知能の各学会の評議員・理事、情報処理学会東北支部長、電子通信学会オートマトンと言語理論専門委員会委員長などを歴任され、学会の発展に大きく貢献されました。また、理工系情報学協会の会長、情報処理教育改善委員会委員を歴任され、情報工学の研究教育環境の整備に献身されると同時に、仙台市総合計画審議会委員として地域の発展にも尽くされました。先生は御退官後は、創設にあたられた北陸先端科学技術大学院大学教授に就任され、平成四年度の第一期生入学を心待ちにされていることと思っております。先生の一層のご健勝とご活躍をお祈りいたします。(阿曾 記)

研究室だより

斎藤研究室は通信工学科回路網学講座の一時的な仮りの名前で、私(斎藤)が昭和四十三年に教授になってからの呼称で、来年三月には私の停年により幕を閉じることになる。あしかけ二十四年にわたる永い間には、多くの優秀な学究が入ってきては去って行ったが、永井健三、喜安善市両恩師

の築かれた学問的伝統を継承し、曲がりなりにも、後輩に伝えるだけの責は全うしてきた積りである。

現在、研究室に任んでいるのは私と二人の助手、技官一人、それに院生および学生である、静谷助手(博62)はモントリオール大学に遊学中であるが、数学が好きで、非線形暗号化および零知識証明問題に打ち込んでいる。工藤助手(博平成2)はCT画像再構成問題で成果を上げ、次の問題として、立体画像処理について勉強中である。また、金丸君(博3年在学中)はコンピュータグラフィックスの手法による自然物の描画を手がけ、苦勞を重ねながらも、見事な標を

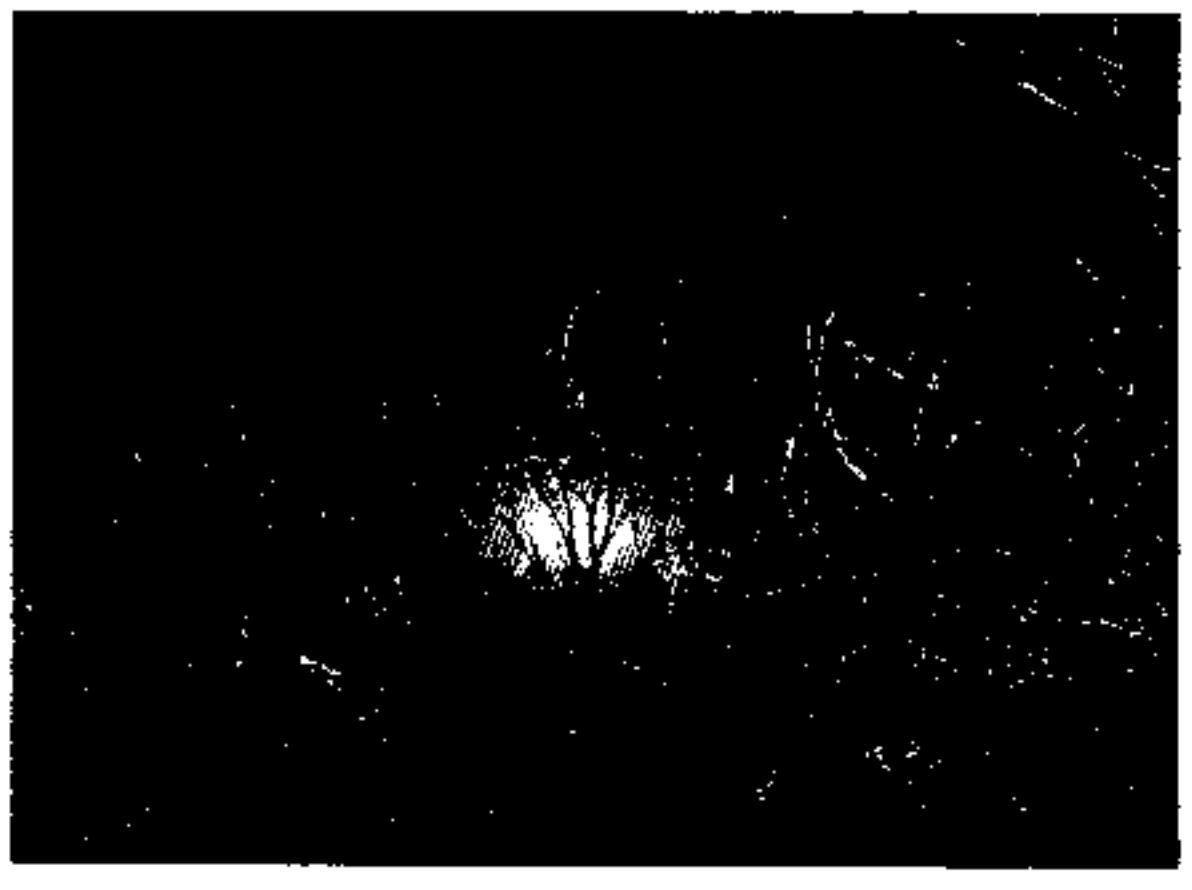
工学部通信工学科

斎藤研究室

では、野寄助手(博47)のハイブリッド行列とグラフ、鈴木助手(博46)の分布定数回路であるが、このあたりから、回路の位相幾何学的性質の究明のため、グラフ理論とか組み合わせ理論の領域に入ってゆく。今宮助手(博48)のハノイの塔、西関助教によるグラフのアルゴリズム、浅野助手(博52)のマトロイド、渡辺助手(博52)のグラフ理論、渡辺院生(博54)のオイラグラフ、高見沢院生(博55)の直並列グラフ、千葉助手(博59)の平面グラフ、斎藤助手(東大博61)のグラフとセキュリティ、鈴木助手(博63)のIC配線問題に至って、現代的回路論が構築されつつある。このほかに、吉沢助教(博58)の人体における姿勢制御などもある。もちろん、これらの人々は独立して、本学、他大学あるいは企業において、それぞれの分野で第一線級の研究者として活躍していることは言うまでもない。

描き出している。私自身の本職は古典的回路合成論、とくに分布定数回路論であったが、若い人達に付き合っというか、引張り廻させられてどうか、種々の事を勉強させられてきた。それらの一端を紹介して、研究室の歴史を語ったことにより。

まず、阿江助手(博44)による電子回路の素子感度と高浪助教授(博45)のオートマトンがある。通信方式関連では千葉院生(博44)のエネルギー最小のパルス波形、三木院生(博45)のパルス通信における量子化特性、斎藤助教(博43)の音声および画像信号処理などである。古典的回路論



電気・情報系の近況

電気・情報系運営委員会

会員の皆様には益々ご健勝にて御活躍のことと存じます。電気・情報系四学科の最近の状況をご紹介させていただきます。

情報工学の分野で数多くの業績を上げられ、情報工学科の創設に多大な貢献をされた木村正行教授が、本年三月をもって停年退官されました。先生は、新設されたばかりの北陸先端科学技術大学院大学に移られ、新しい大学を構築すべく頑張っておられます。先生の益々のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

本年四月には電子工学科の樋口龍雄教授が評議員に選出され、工学部のみならず大学全体の立場から本学の運営に参画しておられます。若さと情熱に溢れる先生の手腕に大きな期待が寄せられております。

次に、その他の人事異動について御紹介致します。まず電気工学科では、四月に後藤幸弘教授が東北学院大学に転出され、十月に宇野亨助手が電気理論講座の助教に昇任されました。通信工学科では、四月に吉沢助教が豊橋技術科学大学に転出され、十月には山田顕助手が電気音響講座の助教に昇任されました。電子工学科では、やはり十月に森田瑞穂助手が固体電子工学講座の助教に昇任されました。情報工学科では、五月に中尾光之助手が生体情報工学講座の助教に昇任されました。また、七月には電子工学科から亀山充隆助教が情報システム工学講座の教授として迎えられ、次いで十月には阿曾弘具助教が教授に昇任されました。新進気鋭の両教授のご活躍が大いに期待されております。

以上の異動により、電気・情報系学科の教授・助教・講師の現員は以下の通りです。(十月現在)

- 電気工学科……教授 安達三郎(主任、運営委員長)、中鉢憲賢、秦泉寺敏正、豊田淳一、竹田 宏、千葉二郎(基礎工学科室)、助教 澤谷邦男、宇野亨、櫛引淳

- 一、一ノ倉 理、大沼俊朗、佐藤光男、松木英敏、鈴木光政(基礎工学科室)、講師 金井 浩
- 通信工学科……教授 中村信良(主任)、斎藤伸貞、高木 相、星宮 望、宮城光信、助教 山田 顯、斎藤光徳
- 電子工学科……教授 内田龍男(主任)、佐藤徳芳、大見忠弘、脇山徳雄、樋口龍雄、助教 針生 尚、高山力三、飯塚 哲、柴田 直、森田瑞穂、高橋 研、川又政征
- 情報工学科……教授 丸岡 章(主任)、伊藤貴康、白鳥則郎、阿曾弘具、西関隆夫、亀山充隆、山本光璋、助教 堀口 進、中尾光之

なお、長年、工場で研究装置の製作と学生の技術指導を担当され、電気系の発展に貢献された大内陸雄技官が十月十六日四十七才の若さで逝去されました。心からご冥福をお祈り致します。

電気・情報系における、本年三月の学部卒業生数は二四三名、大学院電気及び通信工学専攻、電子工学専攻、情報工学専攻の前期課程修了者は一八名、後期課程修了者は二十名であります。なお、現在の学部四年生は二五五名、大学院前期課程二年次の学生は一三一名、後期課程三年次の学生は二十二名であります。

本年度は通信工学科が昭和十六年に創設されてからちょうど五十周年にあたります。これを記念して、平成四年一月三十一日と二月一日の両日、記念祝賀会や研究室公開などの諸行事を同窓会と共催で行うことを計画しておりますので、多数御参加下さいませようお願い致します。

東北大学では、最近、情報科学研究科構想をはじめ、大学院重点大学構想など大学の将来を左右するような重要な検討課題が浮上ってきており、熱心な議論が行われております。また、西澤学長や竹田教授の御努力で近々電気・情報系に寄付講座が誕生することになりそうです。末筆ながら、会員の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。(中村 記)

電気通信研究所の近況

通研広報委員会

会員の皆様にはますますお元気で活躍のこととお喜び申し上げます。

現在、電気通信研究所は稲場文男所長をはじめ、教職員一十二名(その内、教授一四、助教一六、助手三二、技官二一)、受託研究員一九名、内地研修員一名、研究生二四名、(外国人研究生八名)、学部学生八十名、大学院生一六七名(外国人留学生二四名)の総勢四二二名の研究陣を擁しております。

通研のこの一年を振り返りますと、以下のような人事異動がありました。

平成三年五月に大内一弘助教が制御工学部門の教授に昇任されましたが、同八月に退官され秋田県高度技術研究所長に転出されました。さらに、六月、分子電子工学部門の須藤建助教が工学部材料物性学科教授に昇任され、十月には光波通信工学部門の白石一男助教が宇都宮大学工学部助教として転出されました。

四月より山下努教授が通信用電子物理部門担当として長岡技術科学大学から配置換えになられ、七月には山口正洋助手が電気通信材料部門の助教に昇任されました。また、同じく七月に、固体電子工学部門の宮本信雄教授、末光真希助教が分子電子工学部門へ所属換えされております。

以上の異動の結果、現在(十月五日)の各部門の専任教授、および助教は次のようになっております。

音響通信(曾根敏夫教授、鈴木陽助教、富樫助教教授)、電波伝送(米山務教授)、超高周波(小野昭一教授、横尾邦義助教)、通信用電子物理(山下努教授、今井捷三助教)、電気通信材料(荒井賢一教授、山口正洋助教)、情報理論(佐藤雅彦教授)、光波通信工学(川上彰二教授、皆方誠助教)、記録工学(中村慶久教授)、光電変換

工学(瀧田實勝教授)、固体物理工学(山之内和彦教授、竹内正男助教)、超導電子工学(堀名博子助教)、電子音響学(坪内和夫助教)、量子電子工学(稲場文男教授、伊藤弘昌助教)、プラズマ電子工学(沢田康次教授、中島康治助教、佐野雅己助教)、分子電子工学(宮本信雄教授、末光真希助教)、超微細電子回路実験施設(施設長・小野昭一教授、結晶育成部主任・山之内和彦教授、測定解析部主任・宮本信雄教授、測定解析部助教・庭野道夫、加工開発部主任・小野昭一教授、加工開発部助教・室田淳一)

すでに皆様ご存知のように、東北大学では情報科学研究科(仮称)の新設がホットな話題となるなど、私共をとりまく研究・教育環境が大きく変わろうとしています。この期にあって、通研でも、従来からの電気系一体運営の伝統と目前の動向を如何に調和させ、将来に禍根を残さぬ対応を求めて鋭意努力を重ねていきます。

なお、申すまでもないことではありますが、研究所所員一同、通研ひいては東北大学の輝かしい歴史を汚すことのないよう、後進の育成および最先端の研究に日夜邁進しております。先輩の皆様のご指導、ご支援を切にお願い申し上げます。

最後に、次第でありましたが、会員の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。(米山 記)



電気通信研究所

小野研究室

には、電子管の動作効率の改善が最重要研究課題であります。こうした状況の中で、小野先生発案のペニオトロンは、動作効率がほぼ一〇〇%に達することが理論的に実証された夢の電子管であります。研究室では、この夢に一步、二歩と近づいたための地道な努力を続けており、これまでにも、動作効率の点で数々の世界記録を樹立しています。

一方、次世代電子デバイスとして、半導体デバイスと同程度のミクロンサイズの微小真空管や、その集積回路を開発しようとする気運が高まっております。これは、動作領域としての真空の利点を見直して、超高速デバイスや電磁環境、高温環境に強いデバイスを開発しようとするものです。このデバイス開発の成否の鍵をにぎる微小冷陰極を始め、その基礎研究を行っています。これも電子管研究の一分野かと思われれます。大電力、微小電力を問わず、小野研究室が我が国の電子管研究の中心地と言えるでしょう。

独創研究には、知力、体力、胆力の充実が重要であるとの小野先生の指導のもと、研究室一同それぞれテーマに真剣に取り組んでいます。電気系恒例の駅伝大会で、過去六年間で四回の準優勝の後、昨年は遂に優勝の栄誉に輝いたのも、体力、胆力養成の賜物かと思われれます。

研究室も発足以来二十年を経過し、同窓生の数も一〇〇名に達し、国内外で活躍されています。

小野先生は、現在電気通信研究所超微細電子回路実験施設長を始め、数々の要職にあり、増々多忙を極めておりますが、意気軒昂で独創研究と研究室の指導にあたられています。

研究室だより

超高周波部門は、昭和十年に創立された東北帝国大学附属電気通信研究所の官制の変更により、同大学附属電気通信研究所の第五部門として、昭和十九年に誕生しました。その後、マイクロ波帯域の伝送、発生の研究を経て、昭和四十五年より小野昭一教授に引き継がれています。現在、小野先生の指導のもと、職員、学生、総勢十九名が日夜研究に励んでいます。

現在研究室では、本研究所発足以来の伝統であるマイクロ波、ミリ波の発生を主テーマに電子管の開発研究に取り組んでいます。今時、電子管研究とはと奇異に思われる方も多いかと思いますが、次世代エネルギー源として期待される核融合プラズマの加熱は、メガワットを越える短ミリ波の発生無しには実現しません。また、素粒子物理学研究のための超大型加速器の建設からは百メガワット以上のマイクロ波の発生が要請されています。このような大電力マイクロ波、ミリ波の発生

通研シンポジウム

「離散アルゴリズム」

斎藤 伸 自
(昭和二十六電卒)

一九六四年に、全国の研究者を集め、電気通信・電子及び情報工学の分野における最新かつ重要な諸問題について、相互に情報を交換し討議することを目的として始まった東北大学電気通信研究所シンポジウム(通称・通研シンポ)も回を重ね二十八回目を迎えました。今回は十月十七、十八日の両日、工学部青葉記念会館で約一〇〇名の参加者を集め開催されました。

本シンポジウムで取り上げられたテーマは「離散アルゴリズム」です。近年の情報処理技術の目覚ましい発展は、様々な分野で離散的構造を有する問題を発生させております。従って、それらに対処するための離散アルゴリズムの設計には、計算幾何学、グラフ理論、組合せ論、現代線形計画法、計算量理論など、実に幅広い分野での基礎理論や手法が要求されてきています。本シンポジウムでは、この新しい局面を踏まえ、離散アルゴリズムを総合的見地から検討していこうという目的をもって提案されました。

二日間にわたり、幅広い分野でそれぞれ第一線で活躍されている二十二名の研究者の方から、最新の研究発表がなされ活発に討議されました。ここでは紙面の関係上、個々の論文についてご紹介できず残念であります。皆様それぞれの分野で第一人者と称されるに相応しい質の高い内容でありました。とりわけ、参加者の多くの方から、近似、逐次、並列、分散といった様々なタイプの、グラフ、ネットワーク、幾何など様々な対象を扱ったアルゴリズムについて、専門家を一堂に会し、総合的な立場から検討を加えた例はないと、その独自性にお著めの言葉を頂戴し、通研シンポの伝統に恥じない有意義な研究会であったと自負しております。

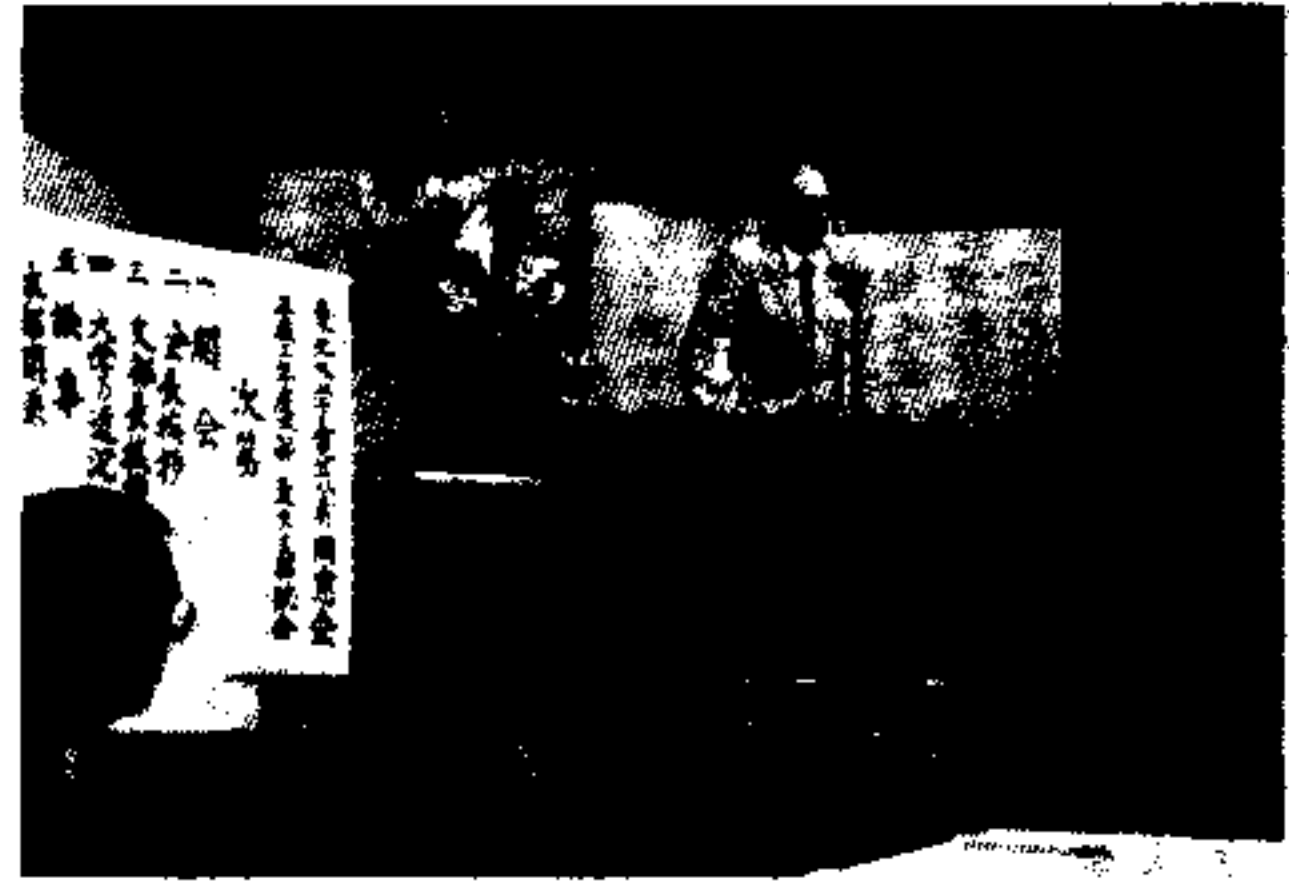
十七日の夜に行われた懇親会も盛況で、全

佐藤利三郎副会長を選出

同窓会本部総会開催さる

平成三年九月五日午後四時半から、神田錦町の学士会館本館において、平成三年度の東北大学電気系同窓会総会が開催された。例年どおり、同東京支部総会との併催で、まず緒方会長、石沢東京支部長の挨拶があった後、通信工学科の斎藤教授から通信工学科の創立五十周年を迎える大学の近況が報告され、議事に入った。事業報告・会計報告が型どおり承認された後、会則第五条の2、副会長の項の「各支部の支部長」を「若干名」に変更する議案が承認され、佐藤利三郎東北大学名誉教授が初の副会長に選出された。従って、平成四年度の本部役員は、次のとおりとなる。会長 緒方研二(昭16)、副会長 佐藤利三郎(昭19)、総務幹事 斎藤伸自(昭26)、庶務幹事 中鉢憲賢(昭31)、会計幹事 荒井賢一(昭41)、会報幹事 曾根敏夫(昭33)。引続いて東京支部の総会に入り、大槻新支部長の挨拶で終了した。

この後、鐘紡株常務取締役古島町子氏の「一九九〇年代、女性に何を求めているか」という題の講演があり、二百名を超える会員が参加しての盛大な懇親会を最後に、予定の行事を完了した。(曾根 記)



支部便り

東京支部

支部長 大槻 幹 雄
(昭和二十九通卒)

平成三年度は、一昨年より進めてまいりました支部の様々な活動を軌道に乗せると共に、さらなる飛躍を目指し努力を重ねております。主な活動としては、東京支部総会を本部と合同で九月五日(木) 学士会館に於いて、会長はじめ本部役員の先生方ご出席のもと盛大に開催することができました。例年通り本部・支部の活動報告、会計報告に引き続き次期役員として支部長に東海林恵二郎氏、副支部長

北海道支部

支部長 廣 川 勇 司
(昭和三十一年電卒)

北海道支部は設立以来川上隆夫さん(昭和十八年通信卒)が、支部長として盡力して来られたが、平成三年度退任され、小生が後任を引き受けることになった。北海道支部は広大な地域の割りに、会員数は少なく現在約五十名を数えるに過ぎない。そのうち約三十名が札幌圏在住である。支部としては年一回札幌で懇親会を開き、昔話に花を咲せる程度である。これは北海道の場合には青葉工業会の会合、秋には全学の同窓会連合会を実施しているため、支部としては全力を挙げてこれを応援する体制をとっているためである。春には松本伍良先生にお

に高橋昌宏氏、幹事に廣岡浩氏、副幹事に伊東紀夫氏を選任致しました。恒例の特別講演は、鐘紡株式会社常務取締役の古島町子氏をお招きし、「一九九〇年代、女性に男性に何を求めているか」と題して、女性の社会進出が進む中で男性の意識改革が必要であると、男性にとつて少々耳の痛い話などを交えて大変有意義なお話を聞くことができました。続いて開かれた懇親会には昨年を上回る二〇〇余名ものご参加を頂き、和気あいあいとした雰囲気の中、時間の経つのも忘れて楽しい歓談のひとときを持つことができました。新しい活動としては、同窓会の一層の活性化のため八月末に若手を中心企業間ネットワーク交流会を開き、活動内容・方法等のアイデア抽出を行いました。このような企画の中から、今後若手を中心とした活動が出てくることを期待したいと思います。また産官学フォーラムは通信工学科創設五十周年記念行事に合わせ、来年一月末仙台での開催を計画しています。このような様々な活動を通して、会員の皆様方の親睦を深めると共に、母校である東北大学の一層の発展にも貢献できるよう、皆様方の暖かいご支援をお願い申し上げます。

願いで、聯アドバンテスト研究所を見学させていただき、常日頃業務に追われているわれわれに最先端の研究の雰囲気に触れさせていただいたことに感謝している。

十月七日には西澤学長をお招きして、東北大学同窓会連合会総会が開かれ、百七十人近い参加者で近年にない盛り上りを見せた。席上同行された万谷志郎先生から工学部の現状につき詳細なご説明があり、なつかしさと同時に心強く思ったひとときを過ごすことが出来た。

最近産学共同という言葉をよく耳にする。北海道の場合なかなか産のレベルが向上しないのが問題のようである、レベル向上のためにも、何とかして会員が増えないものかと、祈るような気持である。皆様のなご一層のご指導とご支援をお願い申し上げます。

東海支部

支部長 本多波雄
(昭和十九・九通卒)

本年度は、通信工学科創立五十周年に当たるとのこと、その第一回卒業生である小生にとつて、まことに感無量なものがある。記念行事も行なわれるとのことなので楽しみにしている。

東海支部は、愛知・岐阜・三重の東海三県に加えて、長野・静岡両県にもまたがっている。広い地域の割には同窓会員が少なく、その数は約三〇〇人で、しかも横ばい状態が続いている。産業首都と称する割には、寂しい状況にある。

平成三年度支部総会は、七月一九日、浜松名鉄ホテルで、会員約五十名が出席して、開催された。従来、名古屋に片寄っていた開催地を分散しようということで、昨年の豊橋に引続いて、本年は舞台を浜松に移したものである。

かつて、渡辺寧先生が静岡大学の学長をされていたこともあり、浜松にはかなりの会員がいるはずと目算を立てていたが、予想通り、

地元から二十五名近い出席があった。運営については、静岡大学と聯ヤマハに幹事をお願いし、また、本部から丸岡章教授を迎えて、母校の近況などをうかがい、歓談に時の移るのを忘れた。

関東支部

支部長 三上遵太郎
(昭和三十一通卒)

通信工学科が創立され、これまで数々の輝かしい成果を挙げられ、このたび五十周年を迎えられたことを、関西支部としまして心からお慶び申し上げます。

さて関西支部は現在約三五〇名の会員から構成されており、近畿六府県を中心に、岡山県等にも渡っており、支部総会の代わりには会員相互の親睦を深めるため、ほぼ毎年同窓会を開催しております。支部長は二、三年程度の任期で、各団体、企業が持回りで担当しております。

つい最近の同窓会は、平成三年六月二十一日に二年ぶりに開催されました。昨年は久しぶり青葉工業会の近畿地区同窓会が盛大に開催されましたので、電気系の方はお休みさせて頂きました。

今回はお忙しい中、大学より電気工学科中鉢教授にご出席いただき、最近の大学の状況や情報科学研究科構想など新しい大学の取組みについてお話し頂きました。支部の活動をこれまで以上に活発にするために、先生にはいろいろとご提案をいただきました。

ご提案に従って現在支部会則を準備しております。また長年支部の活動にご尽力いただきました城阪大先輩(通信十九)には名誉支部長になっていただきました。

また今回はより広い範囲の方々に参加いただくために名簿を整備し各団体、企業毎に幹事を決めさせていただいて、活動を広げることになりました。今後とも同窓会諸兄の一層

のご指導、ご協力をお願い申し上げます。



ヤマハ株

星 十郎
(昭和三十六通卒)

平成三年は私及び家族にとつても思い出多い年になりそうです。

四月十九日には、東北大三十六年卒通信の同期会が、丁度桜の満開の秋保温泉で開催され、二十一名の懐かしい顔とお逢いすることができました。

三十六通信同期会は各メーカーが幹事を持ち回りして京浜地区を中心に何回か同期会を重ねて来ましたが、卒業三十周年に当る今年には、木村英俊(現東海大 元NIT)等の幹事で秋保温泉と旧母校(宮沢)を訪れることができました。

私の住んでいる浜松地区にはヤマハや静大を筆頭に東北大電気系の卒業生が五十名前後おります。東海支部の地方分散化の主旨のもとに、第十五回総会は浜松で開催されました。静大萩野先生より幹事役を依頼(命令?)されましたが、東北大より丸岡章先生を始め、高橋正先生、萩野実先生、熊川征司先生の御奥様と一緒に家内も総会に参加させていただきました。総会の盛り上げに微力をつくすことができました。

浜松地区では、静大の熊川先生と私が三十二年卒の同期と言うこともあり、東北大の同期生は勿論、同窓生が浜松に立ち寄ることがあるとミ二同期会や会を持つのを最近のきまりとしております。



平成三年度は三十六年電気卒の松井孝夫(東芝)や同じ通信卒の中島一恕(松下通信)の各氏と浜松が前記のミ二同期会を持つことができました。

ヤマハには現在二十二名程の電気系の卒業生が活躍しております。私の所属する電子機器事業部の技術部には、私を含め七人おりまして、ヤマハのLSIの開発に従事しております。

以上東北大電気系の同窓生との交流を中心に近況を述べさせていただきました。同窓生皆様の一層の御健勝と御活躍をお祈り申し上げます。

富士通株

勝山 裕
(昭和五十九通卒)



早いもので、卒業して五年もたつてしまいました。関東へ出てくると仙台の生活がいかに快適なものかを実感させられました。最近再び仙台で暮らしていると思っております。

私は、通信部門の企画部に配属になり、在学中から手がけておりました文字認識技術の製品化に携わって参りました。その関係で在学中お世話になった木村先生には、卒業後大変お世話になり、先生が研究の総括として開発された「SEIUN」(高速高精度知的認識システム)にほんの少しだけでもお手伝いできたことは、木村研卒業生として嬉しく思います。

世の中は、バブル経済の破綻で再び製造業が見直されつつあります。但し従来の様なモノレツはいけません。今後は、環境問題も含めた人間的な製品、企業が求められると思えます。また、研究の分野では、日本の基礎研究

の貧弱さがかねて指摘されており、物作り手段の技術だけでなく科学でも世界をリードする研究成果が望まれています。

日本は、科学/技術で世界に貢献することを期待されています。私は、この様なことを実現することを目標に研究開発活動をしていきたいと思えます。また、同窓の皆様と共に日本全体の科学/技術向上に貢献していき、同窓会の発展にも貢献できれば幸いに思います。

東北電力(株)

山野 敬一郎
(昭和六十二通卒)

私は野口研究室を卒業後、東北電力(株)に入社し、現在は仙台の北西部、南吉成にある高度通信システム研究所に出向しております。

いま東北では、産学官が一致協力して、東北地方を日本の頭脳と産業開発の拠点とすることを目指す、壮大な「東北インテリジェント・コスモス構想」を推進しており、高度通信システム研究所はその構想の六番目の研究開発会社として、平成二年三月に設立されました。社長は名誉教授の福島弘毅先生、顧問には野口正一教授および白鳥則郎教授をお迎えして、企業九社から派遣された研究員および客員研究員により、高度情報社会の基盤技術である、情報通信システムの高信頼化設計法および試験検証法、ネットワーク管理技術等の研究開発を行っております。



私の在学当時の研究テーマは、通信プロトコルの仕様記述、ユーザ・インタフェース等に関連した分野であり、現在は非常に恵まれた研究環境で、それらの経験を生かした研究を行っております。また、入社当初には高度通信システム研究

所の設立準備のメンバーとして悪戦苦闘したこともありましたが、引き続き自分が設立に携わった研究所で仕事をしたいと考えていると、非常に貴重な経験ができたと思えます。

今後微力ながら、高度情報社会の基盤となる研究成果を出せるように努めたいと考えております。

藤倉電線(株)

佐藤 信安
(昭和四十一通卒)



小生は、昭和四十一年、佐藤利三郎教授(現東北学院大学工学部)の研究室を卒業

しました。卒論テーマが「同軸ケーブルのインピーダンスに関する研究」であり、又、佐藤教授の御推薦も有り、藤倉電線に入社した訳です。入社後五、六年間は、メタル通信ケーブル全盛の時代でありましたが、その後伝送媒体の研究開発が光ファイバーに移りました。今考えてみると光ファイバーは「神様が、人類に与えた、二十世紀最後のビッグプレゼント」と考えている次第です。

さて、日本に於ける光ファイバーの量産化は、昭和五十七年 NTT (殿) 日本縦貫光ケーブルの導入に始まり、その後長距離大容量 FDM 分散シフトファイバー、そして太平洋横断光ケーブル等、の導入によりメタルケーブルに代わり最近急激な勢いで光ケーブルの構築がなされております。

しかし、光技術は始まったばかりのテクノロジーでこのマーケットは間違いなく将来巨大化すると思っております。

当社は今後二十一世紀「加入者線路全光化」に向け、光システム機器、光伝送システム、光部品そして光ファイバーケーブルの量産化

後継者を積極的に推進し、我々光研究開発者の二十一世紀への夢を実現すべく日夜努力してまいります。

最後に東北大学通信工学科、創立五十周年を控え、東北大学のますますの発展と同時に、会員諸兄の御活躍を期待しております。

村田製作所

門田 道雄
(昭和四十六通卒)

村田製作所は京都市の西隣の長岡京市に本社があり、国内二十一社、海外十九社、従業員総数二万二千名からなっております。長岡京市は平城京と平安京の間の十年間都があった歴史のあるところで、毎年のように遺跡が発掘されています。東北大学から当社への就職の歴史は浅く、十数年前が最初で、その後は徐々に増え、今年で電気系六名、金属系八名、

編集後記

各界のリーダーとして、多忙な毎日を送っておられる方々に原稿の執筆をお願いするのは

計 報

左記の方々の御逝去の報を受けました。謹んで御冥福をお祈り致します。

田中 重朗 (大正十五・電卒)

五十嵐 悌二 (昭和二・電卒)

田中和三郎 (昭和四・電卒)

(旧姓 福富)

石川 武二 (昭和五・電卒)

三浦 政男 (昭和五・電卒)

保田 英 (昭和五・電卒)

(旧姓 中川)

高田 三郎 (昭和十五・電卒)

(旧姓 早川)

堀切 達雄 (昭和二十一・電卒)

岩谷 英司 (昭和二十三・電卒)

時田 宗弘 (昭和二十三・電卒)

舟橋 鉄夫 (昭和二十・通卒)

斎藤 二郎 (昭和二十一・通卒)

安斎 太郎 (昭和二十二・通卒)

八木 広志 (昭和五十三・通卒)

応物三名・・・総計二十二名に増えました。東北大学同窓会は、数年前に石川県で八名(但し特別参加二名)が集い、行いました。

電気系同窓生は横浜開発センターの松岡開発部長(三十七子)を筆頭に、大田(五十三電)、吉岡(五十五通)、井田(六十三通)、後宮(平一修)そして筆者の六名で、いずれもそれぞれの職場で開発や設計を担当し活躍しております。また休日には各地の地の利を生かして、京都観光、スキー、山、海水浴などを楽しんでおります。当社の技術者は、自分で開発設計した商品をも自分で得意先(主に電気メーカー)に、セールスに行くという社風があり、前述の六名は、これからも度々、皆様方の会社を訪ねさせていただきますので、ぜひ気軽に声をかけていただき、商談もそこそこに、なつかしい話に花が咲くことを期待しております。東北大学電気系同窓会の発展と皆様のご健闘をお祈り致します。

は、編集委員の最も心苦しさを感ずる任務であります。心から御礼申し上げます。

ことしは、通信工学科の創設五十周年記念行事予定を同窓の皆さんにご連絡し、できるだけ多数のご参加を得たいとの要請から、例年より二ヶ月以上も早い年内発行を目指して悪戦苦闘しました。幸い、皆様のご協力と、擁引・竹内両編集委員の獅子奮迅の活躍により、無事本号を編集することができました。本号の繰上げ発行を意味あらしめるためにも記念行事への多数のご参加を願って止みません。(曾根 記)

「同窓会便り」編集委員会

- | | | |
|-----|-------|-----------|
| 委員長 | 曾根 敏夫 | ** (33電) |
| 委員 | 中鉢 憲賢 | * (31電) |
| | 荒井 賢一 | ** (41子) |
| | 岡添 健介 | *** (39電) |
| | 室田 淳一 | ** (教官) |
| | 柴田 直 | * (教官) |
| | 竹内 正男 | ** (48修) |
| | 擁引 淳一 | * (46通) |

* 東北大学工学部
** 東北大学電気通信研究所
*** 富士通(株)